

CHOP 療法におけるペグフィルグラスチムの費用対効果に関する情報公開

1. 研究の対象

2014年1月1日から2015年12月31日の間に名古屋大学医学部附属病院を非ホジキンリンパ腫で受診され、初回CHOP療法の治療を受けた方

2. 研究目的・方法

非ホジキンリンパ腫の標準的な化学療法であるCHOP（シクロホスファミド、ドキシソルビシン、ビンクリスチン）療法は、発熱を伴う好中球減少症（発熱性好中球減少症（Febrile neutropenia:FN））が高頻度に起きる治療です。G-CSF製剤は、抗がん薬治療によるFNの治療もしくは予防に標準的に用いられる製剤です。なかでも持続型G-CSF製剤であるペグフィルグラスチム（Peg-G-CSF）の1日予防投与がこれまでの短時間作用型G-CSF（G-CSF）11日間投与と比較してFN発症率を有意に低下させることが近年報告され、Peg-G-CSF製剤が国内で承認されました。近年薬剤の効果が費用に見合うかどうかの研究がなされており、海外では非ホジキンリンパ腫の治療に対してPeg-G-CSFはG-CSFに比較して費用対効果が優れないと報告されていますが、日本ではまだ報告がありません。

そこで、非ホジキンリンパ腫に対しCHOP療法を受ける患者のFNに対するしてPeg-G-CSF単回投与とG-CSF11日間投与の費用対効果を明らかにするのが目的です。

2014年1月1日から2015年12月31日の間に名古屋大学医学部附属病院を非ホジキンリンパ腫で受診された方のカルテ情報を使用します。具体的には血液検査と腋下体温と使用薬剤の項目を参照させていただきます。研究のために検査を追加するなど、患者さんの負担となるようなことは行いません。集められた情報を解析し、ペグフィルグラスチムはフィルグラスチムと比較して、費用対効果が優れているかどうか、検討させていただきます。

3. 研究に用いる試料・情報の種類

治療を開始した時の年齢、性別、体重、身長、腋下体温、採血データ（白血球数、好中球数、血小板数）、使用薬剤（Peg-G-CSF、G-CSF、抗菌薬）等。

過去のデータを調べる研究であるため、新規での血液採取、問診、検査などは行いません。

4. 外部への試料・情報の提供

共同研究機関へのデータの提供は、特定の関係者以外がアクセスできない状態で行います。対応表は、当院の研究担当者が保管、管理を行います

FAX 052-744-2685